

研究ノート

映画『公園 (The Park)』にみる中国式お見合い

因幡宣亨

中国では、2000年代前半から「公園相親（公園お見合い）」と呼ばれるお見合い方法が都市部を中心に盛んである。「公園相親」とは、結婚相手を見つける基準となる「征婚広告（結婚相手を探すためのプロフィール用紙）」を用意し、公園の一角の地面に置いたり、木や掲示板に貼り付けたり、直接それをもって交渉しに行ったりしながら意中の相手を見つける、一種のお見合い方法である。現代中国は「新媒婆時代（自らが自らの仲人になる時代）」¹（李2012）であり、結婚できない子弟を心配する高齢者による代理お見合い現象が注目され、「白髪相親（白髪のお見合い）」と呼ばれている。その「公園相親」、とりわけ「白髪相親」を取り扱ったのが2007年の尹麗川監督作品「公園(The Park)」である。少し長くなるが、以下にあらすじを紹介しておこう。

中学校で政治を教えていた高遠山（王徳順）は退職後、よく娘の小君（李佳）のもとを訪れるようになる。小君は昆明のテレビ局でレポーターとして働いている。そんな娘のために結婚相手を探そうとするが、実は小君には音楽家を目指している年下の彼氏（徐涛）がいた。彼氏は高遠山に、「自分の仕事は安定していないから今はまだ結婚の予定はない」と話す。それに対して高遠山はととても怒る。小君は彼氏のことを自分勝手だと感じ、別れを告げる。

高遠山と小君はお互いに口数が少なく、2人の生活には摩擦が多かったが、高遠山にとっては満足な日々だった。そんなある日、ふと公園に立ち寄りてみると公園内で父母達による息子や娘のための代理お見合いが流行していることを知り、彼はその輪の中に入っていく。

高遠山は何人も参加者と交流し、その度に小君は相手の男性とお見合いの場を持つことになるが、元々小君は乗り気ではないため、そこから先に話が進むようなことはなかった。しかし次に現れた男は公園でのお見合いを映像に残し、その現象を社会学的に研究している社会学者の男だった。社会学

者の男は小君に父である高遠山を取材したこともあると話す。社会学者の男は自分の母親に対しては自分の相手を見つけることが目的だと伝えているが、実は母親を騙して公園でのお見合い現象を取材しながら母親の再婚相手を探していた。小君の父である高遠山も社会学者の男の母親もお互いの子供に好感を持っていて、交流を続けていくようになる。小君は社会学者の男が撮影した映像を見たくなり、会いに行く。その映像を見て、初めて小君は父親の高遠山の自分に対する想いを知ることになる。

そんななか、高遠山は社会学者の男の母親と公園での交流を深めていく。小君と社会学者の男はお互いの親について話しあい、二人が再婚相手として相応しいかどうかを見定めようとする。そして高遠山と社会学者の男の母親は一緒にスポーツをしたりしながら、自分たちの娘と息子が順調に交流していることを、運命だと確認し合っていた。そんな時、ふと他の参加者（老婆）が近づいてきて、「私の息子は結婚した」と言いながら” 幸せのおすそ分け” である飴を配ってきた。それに感化されてか、両家揃って4人での食事が行われる。しかし偶然高遠山がトイレに行ったとき、社会学者の男が見知らぬ男性とこそこそ話しているところに鉢合わせてしまう。社会学者の男はその見知らぬ男性に対して、「母親のためにお見合いしているだけだ。信じてくれ」と説得するかのように話しているのを目撃する。二人がゲイの関係にあるのを確信した父親は、もう交際はしまいと決心し、田舎に帰ると全員の前で宣言する。急展開で混乱する社会学者の男の母親に社会学者の男は謝るが、すぐに逃げるように席を立てて行ってしまふ。

高遠山は田舎に帰るため汽車の切符を買いに出かけ、スリに遭い、もめて留置所に入れられてしまう。自分が娘の役に立つどころか、娘に迷惑をかけたことがショックで、ふさぎこんだ高遠山は老人性うつ病にかかってしまう。逆に病んだ父を思いやるようになった小君は男手ひとつで自分を育ててきた父の思いに気づき、父と寄り添って生きることを決意する。

この作品の舞台は昆明であるが、昆明に限らず「公園相親」は、現代中国の社会、とりわけ都市部において広く見られる現象である。参加者のほとんどは多くは60歳代後半から80歳代くらいまでの男女²で、退職してから参加

し始める人が多い。多くの人たちは、文化大革命の時代（1966年から1977年まで）に20歳代から30歳代だった世代であり、本人たちは当時の結婚規範にのっとって結婚している。当時は親同士が決めた相手と結婚するか、「媒人」、「媒婆」とよばれる仲人を介して結婚することが多く見られた。しかし、その後そのような結婚は減少傾向にある。実際、1979年以前から2000年以降を4段階で分けた統計によると、「1979年以前」の「父母が決定し、本人の意見は聞かない」という項目が6.6%で最大であり、「1980年から1989年」は0.9%、「1990年から1999年」は0.6%、「2000年以降」は1.0%という結果になっている。またそれぞれを「父母が決定し、本人の意見も聞く」という項目と足しても、16.0%、6.1%、5.0%、5.0%と減少していることが分かる。また「本人が決定し、父母の意見は聞く」という項目は、「1979年以前」は49.6%と半分程度なのに対し、「1980年から1989年」は63.6%、「1990年から1999年」は67.7%、「2000年以降」は66.7%と半数を超えている。またそれぞれを「本人が決定し、父母の意見は聞かない」という項目と足しても、70.6%、79.6%、84.3%、83.4%と徐々に増加してきたことが分かる³。

現代でも親の発言力が強いと言われている中国では、どうにかして子供のために結婚相手を探したいという想いが強い親が多数存在している。そのため、親同士が公園に集まり、世間話などを交わしながらお互いの息子・娘を紹介しあう「白髪相親」が行われているが、「白髪相親」の成功率は上海の事例によると1%未満だとされる⁴。それでも毎日のように参加している人が少なくない。その理由の一部として考えられることが公園での「安心感」と「共感」であり、それが映画の中でも語られている。テレビレポーターである主人公の小君が「どうやって（公園相親を）知ったの？」という問いに、おばあさんが「お隣さんから聞いたんだよ。結婚相談所は怪しいし、お金もかかる。ここなら親が資料を持っている。安心だよ」と語っている。確かに中国には結婚相談所や各種パーティなどが開かれており、さらにインターネット上のいわゆる「お見合いサイト」やテレビでの「お見合い番組」などが多く存在しており、公園で相手を探す以外にも方法はたくさんある。しかしそれでも毎日公園で子弟のために相手を探す理由としては何より無料であり、同じ志を持った者同士が話し合うことで仲間意識が芽生え、交流しやすいよう

な環境になっているのだらうと考えられる。またインタビューの中ではさらに「あなたの子供はあなたの行動を支持しているの？」という質問に対して「しているよ。言うことをよく聞く子で、私の教育が良かったからだろうよ」と答えている。しかしその次の「その子は（参加していることを）知っているの？」という質問に対しては、「知らない。見つかったら教えるつもり」という風に答えている。つまり、親は子供に対して「子が親の言うことを聞くことが親孝行なのだ」という価値観を子供も持っていると感じて疑わないということが分かる。作中でも高遠山（父親）が小君（娘）に対して「知女莫若父（父よりも子供のことを知ってる人はいない）」という言葉を用いているが、その反面父親が娘のために奔走するのに対して、娘はあまり乗り気なふうではない。そこには幸福な結婚生活という理想に失敗した父親への複雑な娘の思いも読み取れる。

2011年度の社会サービス発展統計によると、中国の離婚率は7年連続で悪化。2012年は第1四半期(1-3月)だけでも、中国全土で、46万5000カップルが離婚した。1日平均5000カップルの計算になり、離婚率は14.6%に達している⁵。映画のなかでも、高遠山が娘から「あなたが実現できなかったことは実現させることは出来ない」と告げられるシーンがある。このセリフから、高遠山が幸せな結婚生活を過ごすことができず離婚したらしいことがわかる。1978年に中国政府が一人っ子政策を打ち出して以来、現在では一人っ子の家庭の割合が98%にも上ると言われている。子どもを一人しか持てない状況で、両親は愛情のすべてを一人の子どもに注ぐ傾向がある。一人の子どもにすべての望みを託すことになり、親たちは子どもに自分の理想を押しつける傾向があると言われる⁶。父親（高遠山）としては娘（小君）には結婚という形で幸せになってもらいたいが、娘としては両親が幸せな家庭を築けなかったことから、結婚に懐疑的である。

映画の中でも強調されているように代理お見合いは条件重視傾向が強く、そこから現在の中国の「男らしさ」や「女らしさ」のイメージを読み取ることが出来る。特に、「仕事ができる男」「勉強ができる男」が小君に対してアピールするシーンや、小君の彼氏の生活が安定しないから結婚できないと高遠山に言うシーンなどから、仕事ができる・勉強ができるといった事柄に

よる経済的自立や学力などの文化資本的な要素が、その人の子供の養育に大きく関係し、そうした要素を持ち合わせている男性が魅力的なのだとは社会的に認められているのがわかる。知識、技術、教育と人にはある利点の形があり、それは社会で彼らにより高い地位を与えることになる。両親は子供たちに対して現在の教育制度に成功するために必要な態度と知識を教えることにより、文化的な資本を提供することになる⁷。これをブルデューは文化資本という言葉を使って説明している。文化資本は社会的に何等かの収益をあげうる資本としての文化的「能力」を意味しており⁸、3つの類型に分けられる。第一に、個々の人間が身につけた「素因」として持続する資本。第二に、客体的な状態でありうるモノで、たとえば、書籍、絵画、楽器などのような資本。第三に、制度化された状態でありうるもので、学歴資格においてみられるような種別化された資本である。ブルデューは、「文化資本」をもつかもたないかの違いが、社会的なさまざまな「稀少価値」を獲得できるか否かにつながる。文化資本を獲得することは、一般的には、社会的上昇をはかるのに有利な条件となるとみなされるが、ブルデューはもっと鋭くこの資本の価値増殖の一面を指摘する。つまり、「文化資本の分配構造において、……それ以上に物質的な、象徴的な利得をもたらす」というのである⁹。いわゆる「より良い相手」というのはこの文化資本をベースに捉えられていることが多く、公園でのお見合いにおいて使用される「征婚広告」と呼ばれるプロフィールや相手への条件を記した紙に書かれている内容も、学歴や職業などがアピールポイントになっていることが圧倒的に多い。

しかし、自分の条件が良くても相手に対して自分が要求するような条件が整っていなかったりすると、上手くマッチングできない。作中の主人公、小君はテレビ局で働いており、経済的には自立した女性である。本作では特に学歴については言及されていないものの、高学歴化や女性の地位向上は、結婚に対する意識にも影響を及ぼしている。中華人民共和国建国以前の旧中国社会では男性優位の下、女性の地位は相対的に低かったものの、中華人民共和国建国以後のいわゆる新中国社会では「同工同酬」の原則（女性が男性と平等に仕事をし、同じ給料を得ること）に重点が置かれた。ジェンダー・ギャップ指数でみると63位と日本(79位)より上位に位置し、列国議会同盟(IPU)

発表のランキング (2007年3月現在) によれば、女性国会議員の比率も20.3%と、日本 (9.4%) より高くなっている¹⁰。しかし通例、女性の社会階層は配偶者の社会的階層によって決定される部分が多いことから、女性は上方婚を好むと認識されている¹¹。上方婚とは、学歴や収入、社会的地位などを総合的に階層で分類し、自分自身の階層よりも上の階層の人間と結婚することである。逆に男性は自分よりも高い階層に入る女性を好まず、自分より下の階層の女性と結婚することで自らのプライドを保ちたいと考えるのが通例である。ただし、この場合の階層は制度で定められている階層ではなく、あくまでも当人たちのイメージする、いわゆる“ランク”であると捉える方が正しい。中国には“下娶上嫁 (下の人を娶って上の人に嫁ぐ)”という伝統的な価値観があり、現在でも重視されている。この伝統的な価値観の下では上方婚・下方婚の図式が成り立っていた。しかし、社会主義の理想の下、男女平等が叫ばれ、さらに80年代の改革開放による資本主義経済の導入によって女性の社会進出が進み、女性の地位が向上した。現状はというと、女性は自分より高い階層の男性を求めるので、男性からすれば自分よりも低い階層の女性が相対的に少なくなり、女性からすれば自分よりも高い階層の男性が相対的に少なくなるというジレンマが全体的な傾向から見られるようになった。これが婚姻市場理論と呼ばれる婚姻の市場化を理論化した考え方である。婚姻の市場化は需要と供給の関係で表される。しかし市場経済の下では価格変動が可能なのに対し、結婚市場では“自らを安く売る”という価格訴求が出来ない。そのため、“自分の価値がどれだけ高いのか”という価値訴求に絞られてしまう。価値訴求では当然、条件の良し悪しで吟味されることになるので、条件が悪い人はいつまでも結婚ができず、いわゆる“剩男・剩女 (余り男・余り女)”と呼ばれる未婚者が増えていったのである。2010年人口センサスに基づいた30歳における男女別未婚率はそれぞれ男18.1%、女8.8%、都市農村別未婚率は都市16.2%、農村12.6%であるが、40歳では男女が男4.9%、女1.0%、都市2.8%、農村3.6%に下がる。男性の未婚率が比較的高く、主として農村部で現れている¹²。

成功率が低く、さらに自分の子供から望まれていないにも関わらず毎日参加するという行為については、代理お見合い現象が自分の子供のためだけで

なく自分自身のためであるという観点もある。孫（2012）も、娘息子のために一人の結婚対象にふさわしい人を見つけるのに比べて、お見合いコーナーは父母自身の満足のためだという方が大きい。と解釈している¹³（孫2012）。そもそもこの映画でも公園でスポーツをするシーンが描かれているように、中国社会における都市部の公園は緑にあふれて空気も比較的良好で運動や娯楽に適している場所と認識されることが多い。そうした個人的な活動の中で高齢者同士が友達同士になるというようなことも多く、その先に自分の子供のことが話題に上るといった流れもあるだろう。それだけでなく高遠山のように地元を離れて自分の子供が生活している都市部に移住してきたような高齢者にとっては、身近に自分のコネクションがなく、頼れるような人脈がないこともある。そのため人脈作りのためにも、毎日のように公園に通って交流し、輪を広げているのだとも考えられる。

そういった人脈やコネクションは中国社会では重宝されており、翟（2011）は“关系（guanxi=関係）”は、伝統的中国においても現代社会においても同じように極めて重要な社会現象である¹⁴としている。また東（2007）は中国社会におけるネットワークの蓄積について次のように例えている。ネットワークの蓄積は、イメージとして言えば、ツル性植物の群生と似ている。ツル性の植物、たとえば「家庭の園芸」でよく使うヘデラは、それ自体が幹を持たず、幹を持つ木に巻き付いたり、地をはって、どこまでも伸びる。それは太い幹を持ち枝を伸ばす通常の木々とは異なり、勝手な方向にツルを伸ばし、ツルとツルの間には連絡もない。それが群生していても、全体としてのまとまりはすこしもなく、一本の大木にはならない¹⁵。つまり中国社会における人脈の形成とはとにかく数・地位の高さがモノを言うような、雑多なイメージがあり、人脈があると無いとではその人の人生を大きく左右するのである。費（1985）は中国の伝統的農村社会の特徴として自己と他者との関係性を「一塊の石を水面に投げたときに一輪ずつ押し広がり生じる波紋のようなもの¹⁶」であり、その基本的特性、すなわち中国の社会構造を特徴づけている結合の原則を「あたかも水の波紋のようであり、一輪ずつ押し広がると、遠くへと広がれば広がるほど薄くなっていくようなものである」という比喩で表した。そして、この基層構造を「差序格局」と呼んだ¹⁷。つま

り、序列に従って差が出てくるという意味であり、自己との関係性をはっきりさせているという特徴がある。「己」は西洋のような個人主義ではなく、「全ての価値は己を中心とする主義」すなわち「自我主義」と規定し、（中略）それ故に、「差序格局」の中の道德体系の出発点は、「己を克めて礼に復る」（『論語』顔淵）が最も基本で重要だとする¹⁸。伝統社会の「差序格局」に含まれる主な社会関係は、父系の血縁関係と地縁関係である。父子、夫婦、兄弟姉妹といった家族が、最も内側の同心円状に位置づけられ、「己」との血縁上の遠近によって同心円状に外に向かって父系の親族が位置づけられる。地縁関係を考える場合、中心となるのは「家」であり、「場所の遠近がある種の血縁的親疎を反映している」とあるように、場所的に近い方が、原則として中心に近い同心円状に位置づけられる。半径の長さは血縁の遠近と親疎によって規定される。すなわち、変化の少ない社会において親疎の情感が基本的に血縁の遠近と正比例しているということが読み取れる¹⁹。つまり家中心の社会で「己」というのは自分自身だけでなく家族成員全員を含んでおり、その「己」を取り巻く他者が存在しているという見方である。もし家族の中の男が結婚して嫁を娶るとすれば、嫁側の家族との関係、すなわち「婚姻関係」を結び、「差序格局」に参入することになる。そのため、結婚は個人間の出来事ではなく家族同士の出来事として重大視されるのである。潘（2010）によれば、費孝通は、婚姻とは社会が子どもたちの為に両親を確定するための手段である。婚姻の中から結成した夫婦関係は親子関係から発生したものであると考えている²⁰。つまり子供がいて、その上位に親がいて、それこそが家族であり、それを取り囲むさまざまな関係性の集合体が中国社会全体なのだという捉え方がされている。

農村においては特にそうだが、家族にとっての成功とはすなわち繁栄と持続である。長期的繁栄のためには持続しなければならない。その持続のためには、子どもという存在が大切になる。映画では、父親の「2人で結婚して子供を産まず、誰の世話もしない。それは変態だ」というセリフが出てくるシーンがある。ここから、父親（高遠山）には結婚＝出産という強い考え方が読み取れる。結婚は長期的な契約ととらえることもできるが、長期的契約を形成しようという動機は、「関係特殊的」資産に対して有意義

な投資をしようという点にある。関係特殊の資産とは、途中で相互のプロジェクトが中止されると、価値が激減してしまうような資産である²¹。これがすなわち子どもでもある。また、過去においては、子どもはある種の投資財であった（経済的に未発達諸国においては今でもそうである）。投資財ということの意味は、両親にとって金銭的ないしは少なくとも物質的な見返り（資本回収）を子どもへの投資に期待するということである。しかし、現代の産業国家においては、子どもは基本的に高いコストのかかる消費財でしかない²²。その一方伝統的中国社会において、結婚した女性は、新しい家で安定した地位を見つけ、その地位は、いわば第一に子供を生むことによって、第二に死ぬことによって強化された²³。つまり子供を生むことが女性の地位を確保することに繋がる伝統的価値観を重視する父親（高遠山）に対し、結婚を高いコストのかかる消費財ととらえる娘（小君）というような対立図式があるとも考えられる。

女性の妊孕性は35歳付近を境に急激に減少し、45歳ではほぼ0となる。妊孕性とは不妊治療などを受けない自然な状態での妊娠のしやすさ、妊娠する能力を指す。高齢出産では、妊娠合併症や妊産婦死亡率のリスクが増大する²⁴。作中で高遠山が「娘（小君）はもう若くない」と言い、29歳の小君は苦い表情を浮かべるといったシーンがある。これも出産を考えた際に出来るだけ早く結婚しておいたほうが良いという考え方の現れだろう。

映画の中で小君と話を交わす男性のうちの1人が「成年なのだから、理性的に、伝統的なものに戻らない」と語るシーンがある。そこにあらわれているのは伝統への回帰、つまり親と子供の関係を「親が子どもに対して養育を行い、それが長じては子どもが親を扶養するという権利・義務の双方向的な授受を規範化する『フィードバック型』の親子関係」²⁵に戻すべきなのだという理念が影響しているのではないかと考える。それは映画後半部分の、父親が老年うつ病にかかってから娘がその介抱をしながら徐々に親を理解していくというシーンからも読み取れなくはない。映画のなかの「子供は結婚したら親の世話をしない」「今の結婚相手の条件は”車持ち” “持ち家がある” “父母がいない” だそうだ」といったようなセリフからは、親への関心が徐々に弱くなり、伝統的な価値観が失われつつある現代中国の若者の現状

が描かれる。しかし、子供が結婚する際には車や家などは親が準備するのが当然のこととされている²⁶ため、双方向的な「フィードバック」構造の理念は保たれているとはいえない。そうなると親世代としては自分を介護してくれる（作中で父親の世話をする小君のような）下の世代がいらないということに不安がる。中国では退職金やその他の社会保障が整っているとはいえない。そういった所からも、退職してすぐに子供のために結婚相手を探して将来の自分の世話をしてくれたり自分の子供が高齢になったときに介護してくれたりする存在を探さなくてはならないと焦るのである。しかしそうした親の気持ちも理解しつつ、子世代は自分の要求に合致する条件を持つ人を探したい、もしくは結婚よりも自己実現の方を優先したいという気持ちがあり、親子間でギャップが生じている。世代間のギャップやそれによるずれ違いが生じることで、親の病気などの「もしもの時」に備えられないことは、常態のようになっている。そのため、上述の「伝統的なものに戻らない」という意見はこうした親世代の代弁をしているものだと見える。

この映画は親子関係の描写にかぎらず、公園という空間の役割を重視している。社会学者の男と見知らぬ男がゲイであることを示す直接的な描写は無いものの、表情や話し方、また見知らぬ男性が何度も社会学者の男に対して女と結婚してしまうのではないかと心配をしているところからも、同性愛者という設定にしているのは明らかである。では、物語の展開上は特に重要とも思われない同性愛者を、なぜわざわざ登場させたのだろうか。それは、「公園」という題名で映画を制作する際、「公園」で行われている「男女」の結婚を促すような描写の中に、それに相対するような存在を描くことを意図したからではないかと考えられる。「公園」「トイレ」「バー」等の公共空間は、中国本土では“点儿(スポット)”と呼ばれることが多く²⁷、同性愛者が集まりやすい空間である。彼らは少数派として、都市部での生活の中で如何に相手を探すかという問いに対して集まりやすいスポットを予め知識として設定しておき、“同志”を探しているのである。彼らもいわば人脈難民なのである。ということは本作中の同性愛者も「公園」で出会った可能性が暗示されているのである。本作は男女の出会いの場としての公園という社会空間の使われ方だけに焦点を当てているわけではなく、同性愛者も含め老若男女問わず

さまざまな人々が交錯する場所としての「公園」を描こうとしたのだろう。特に本作の主人公は娘の小君であるが、物語の主軸は父親である高遠山の一举手一投足である。それを娘がどう感じ、高遠山とどう関わっていくかということが描かれている。中でも公園での高遠山の登場シーン数は主人公である小君と比べて遥かに多い。その「公園」を題名として使用しているということから、高遠山は主人公である娘の小君を支えるような存在でもあり、裏の主人公でもあるとも言える。しかしそのような親子間の上下関係も、作品の中では「未婚の一人娘が父親を介護する」というラストシーンで締めくくられている。そのような選択を含め、この映画は、現在の中国社会の家族関係を公園という場所をベースに描き出すことで伝統的な親子関係の変化を表現しているのである。その点では、社会学者の男は、尹麗川監督自身の陰画なのかもしれない。

映画「公園」は、小説家、詩人でもある 1973 年生まれの女性監督尹麗川の初めての監督作品である。尹麗川にはフランス留学経験があり、その影響か作品の中でも家具や衣装など小道具の細かいところまで気を配り、映像は色彩感にあふれたセンスの良いものである。尹麗川は本作以前にドキュメンタリー映画を撮影した経験があり、この映画もドキュメンタリーの手法を持ち込みながら、現代社会を彼女なりに解釈し描き出そうとしている。物語の背景として離婚や結婚難、老人問題など現代中国社会の抱える問題点を提示しつつ、その背後にある伝統的価値観と現代的価値観の錯綜や家族と社会の関係、親子間のジェネレーションギャップを詳細にドキュメンタリータッチで描いていく。全体的には、父親が娘の結婚相手を紹介するという伝統的なあり方に対する、娘が自分自身で相手を見つけるという現代的な考え方という対立を大きな括りとして描こうとしているようにみえるが、そこからさらに「親と子」「異性愛と同性愛」など、複線的な対立軸を作中の背景に持ち込み、それぞれが影響しあってこの 90 分の映画が成り立っている。

注

¹ 李崧 2012 「中国进入“新媒婆”时代」『新西部』2012 年 Z1 期 陕西省

社会科学院

- 2 肖翊 2012 「公园相亲的老人们」『中国经济周刊』人民日报社
- 3 马春华, 石金群, 李银河, 王震宇, 唐灿 2011 「中国城市家庭变迁的趋势和最新发现」『社会学研究』2011年2期 中国社会科学院社会学研究所
- 4 魏伟, 富晓星 2013 「城市, 空间和同性恋-中国本土经验以及区域差异」『青年研究』pp.68-76,2013,1 中国社会科学院社会学研究所
- 5 「人民网 日本語版」2012年7月4日
- 6 高天碩, 木藤恒夫 2008 「中日大学生の独立意識と親子関係」『久留米大学心理学研究』7,pp.19-28,2008 久留米大学
- 7 Bourdieu, Pierre 1986, *The Forms of Capital*. In John Richardson, Ed. *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*. New York: Greenwood Press, pp. 241-258.
- 8 片岡栄美 1997 「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』9号、日本家族社会学会 p.24
- 9 井上正志 1986 「P.ブルデューの「文化資本」概念の社会的基礎と制度的位置」『教育社会学研究』第41集日本教育社会学会 pp.173-174
- 10 内閣府男女共同参画局 2008 「中国における女性の社会参画——中国男女平等・女性発展状況白書（2005年）等より」『男女共同参画白書 平成20年版』
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h19/zentai/danjyo/html/column/col01_00_01.html
- 11 小林淑恵（西野理子・稲葉昭英・嶋崎尚子編）2006 「学歴下方婚のすすめ—類婚選択と実現された生活」『NFRJ03 第二次報告書』日本家族社会学会 全国家族調査委員会
- 12 巖善平 2013 「中国における少子高齢化とその社会経済への影響——人口センサスに基づく実証分析」『JRI レビュー』（日本総研）No.4 2013年3月 pp.21-41
- 13 孙沛东 2012 『谁来娶我的女儿 上海相亲角与“白发相亲”』中国社会科学出版社 p.2
- 14 翟学伟 2011 『中国人的关系原理』北京大学出版社 p.94
- 15 東一眞 2007 『中国の不思議な資本主義』中公新書 pp.51-53
- 16 費孝通 1985 『乡土中国』三联书店
- 17 花澤聖子 2010 「近代化政策下における中国農村社会の「差序格局」」『神田外語大学紀要』22巻 pp.31-52
- 18 同上 p.35

- 19 同上 p.36
- 20 潘允康 2010 「试论费孝通的家庭社会学思想和理论—纪念费孝通先生诞辰 100 周年」『天津社会科学』天津社会科学院社会学研究所
- 21 アントニィ・W. ドゥネス=ロバート・ローソン 2004 『結婚と離婚の法と経済学』 木鐸社 pp.30-31
- 22 同上 p.31
- 23 M・フリードマン (末成道男・西洋治彦・小熊誠共訳) 1991 『東南中国の宗族組織』 弘文堂 p.40
- 24 Henri Leridon 2004 ,Can assisted reproduction technology compensate for the natural decline in fertility with age? A model assessment, *Human Reproduction* Vol.19, No.7 pp.1548-1553
- 25 費孝通(横山廣子訳) 1985 『生育制度-中国の家族と社会』(東京大学出版会)
- 26 马春华, 石金群, 李银河, 王震宇, 唐灿 2011 「中国城市家庭变迁的趋势和最新发现」『社会学研究』2011 年 02 期 中国社会科学院社会学研究所
- 27 富晓星・吴振 2010 「男同性恋群体的城市空间分布及文化生产:以沈阳为例」『工程研究-跨学科视野中的工程』2010 年 01 期 中国科学院大学